

〈新著紹介〉

三好伸芳『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体飾修構造』ひつじ書房、2021年3月刊

窪 田 悠 介

本書は日本語の連体修飾構造の意味解釈に関する記述的なアプローチでの研究である。全体で9章、268ページの長さの著書であり、その内容は、著者が2017年に筑波大学に提出した博士論文を加筆修正したものである。

日本語の連体修飾というと、誰もが真っ先に寺村秀夫の内の関係と外の関係の研究を思い浮かべるだろう。寺村の研究の重要性、先駆性には疑いの余地がないが、ほぼ半世紀を経た現在の時点から振り返ってみると、影響力の強い研究の常として、後続研究の方向性をやや狭く定めすぎた面があったとも言える。一言で言って、寺村以降の連体修飾の研究は、もっぱら修飾節と被修飾名詞との意味関係をほぼ唯一の関心事として扱ってきた。本書は、この研究の流れに目配りをしつつも、(統語的には修飾構造の外にある)主文述語が修飾関係の決定に対してどのような影響を与えるかに着目している点に独自性・新奇性がある。この意味で本書は、寺村の呪縛から解放された連体修飾の新研究の最前線に位置するものと言える。

「修飾」という概念は、一見自明のようでいて、厳密な定義をしようとする途端に限りなくとらえどころのないもののように見えてくる厄介な代物である。そして、実のところ、そのとらえどころのなさ、一枚岩でないありかたにこそ、この概念の本質があるのではないか。海外の形式意味論研究の最近の展開を見てみると、初期の論理的アプローチの硬直さから自由になったこうした見方が、ようやく分野をリードする研究者たちによって示され始めている(たとえば Marcin Morzycki (2016) *Modification*, Oxford University Press など参照)。このようなものの見方は、以下で述べるように本書の問題意識と直結

するものであり、その意味で、本書は、日本語の記述研究者だけでなく、形式意味論や統語論などの理論言語学の研究者にとっても必読書である。

興味深い言語現象の観察や洞察に富む問題の整理が豊富で、また、(良い意味で) 勇み足で荒削りな主張を含む本なので、後は読者諸氏、本書を手にとって自ら精読していただくのがよいと思われる。以下ではごく簡単に本書の「さわり」を紹介し、本書を読む際に注意しておくことよさそうな点について読者の注意を促すことで評者としての責を塞ぐこととしたい。

上で述べたように、本書における著者の主要な関心事は、被修飾名詞と文全体の述語との意味関係が問題となるような、連体修飾に関する一連の現象群である。分かりやすい例を一つ挙げると、以下のようなものがある (p.38; 本質的でない紛れを避けるため、(1b) は原文から一部変更した)。

- (1) a. [スーツを着た] 太郎が訪ねてきた
 b. [スーツを着た] 太郎が格好いい (こと)

主語名詞が同じ修飾節と被修飾語の組み合わせから構成されているにもかかわらず、(1a) と (1b) は論理的帰結 (entailment) のパターンが大きく異なる。(1a) からは、「太郎が訪ねてきた」と「太郎がスーツを着ていた」の両方が論理的帰結として成立するが、(1b) からは、「太郎が格好いい」と「太郎がスーツを着ている」は帰結しない ((1b) が言っているのは、あくまで、「スーツ姿の太郎が格好いい」ということだけである)。このような解釈の違いは修飾節と被修飾語の組み合わせを見ているだけでは説明がつかず、著者はこのコントラストにおいては主節述語 (「格好いい」) の内包性が重要な役割を果たすという提案をしている。これは、記述的には、修飾節と被修飾語よりもさらに外の要素まで参照しないと修飾節と被修飾語の関係が一意に定まらない現象と特徴づけることができ、形式意味論研究などにおいて一般に仮定されている意味の構成性の原理にとって (少なくとも一見したところ) 問題となるような、理論的にも興味深い現象である。

以下、特に記述的研究を読み慣れていない読者に対して、少し注意が必要と思われる点を指摘しておく。著者の提案においては「内包的述語」や「内包的文脈」などの術語は、対象となる表現の分布的特徴や、表面的に観察される意味解釈の差異に基づいて規定される、(あくまで本書が提案する体系内での) 記述的分析のための便宜的な道具のようなものであり、トップダウンに理論的な特徴づけが与えられる概念ではない。この点は本書を注意深く読めば明らか

だろうが、一方で、字面がまったく同一の用語が他分野では慣習的に違う意味で用いられているケースもあり、この部分のずれを見逃すと根本的な誤解につながる可能性がある。たとえば、(1) や類例に関する議論の中で中心的な役割を果たす「内包的述語」という用語については、形式意味論研究における一般的な理解をそのまま持ち込んでしまうと混乱のもととなりかねない。参照透過性や *de dicto/de re* 読みの曖昧性などに基づく形式意味論での一般的な定義で考えると、本書で「内包的述語」と分類されている (p.37) 「好きだ」「立派だ」などが内包的述語であるかは決して自明でなく、微妙で複雑な問題をはらんだ慎重に検討すべき事柄である。本書で著者は、一般的な参照透過性のテストと表面的に類似したある種の推論の妥当性を内包性の判定基準と考えているようだが (たとえば p.68 の「ポチは賢い」と「シバイヌは賢い」に関する議論と、それが前提としている p.31 の議論を参照)、この判定基準がそもそも何をテストするものであるかは著者の議論からは必ずしも明らかでなく、また、(紙幅の都合もあろうが) 「内包的述語」と分類されるすべての述語に関して厳密にテストが行われているわけでもない。このため、著者の「内包的述語」の概念に関しては判定基準とその適用結果の両方に関して不明瞭な点が残されており、形式意味論における一般的な理解と著者の分類とがどのような関係にあるかは、未解決の問題のまま残ることになる。特に理論的指向性が強い研究のバックグラウンドを持つ読者は、このような点に十分注意しながら本書を読む必要がある。

そして、より重要なことは、このような分野間の「ずれ」が、まさしく分野横断的な新研究を誘発する余地を持ってくすぶっている隣接分野間の接点であるという点である。形式意味論研究との関連に限って言えば、本書の規定での広い意味での「内包的述語」の概念を形式意味論の概念でどう捉え直すのか、また、上の (1) や、本書で扱われている同種のより複雑な例を形式意味論のアプローチでどう分析するのかなど、課題は山積である (「好きだ」「立派だ」などの述語に関していえば、これらの述語の語彙意味論を精緻に分析する作業がまずは必要であり、その過程で従来の形式意味論における内包性、内包的述語などの概念を再定義・再構成する必要が生じることもあるだろう)。記述的に規定された複数の概念群の複雑なネットワークによってボトムアップに現象の性質を丹念にあぶり出していこうとする著者の手法はまさに記述的研究の王道を行くものだが、それゆえ、トップダウンに仮定を立てて分析的に現象を把握するタイプの理論研究に慣れ親しんだ読者は、所々、必要以上に分かりづらい印象を受けるかもしれない。しかしながら、分野間の「ずれ」に由来する居

心地の悪さを辛抱し、根気よく著者の言い分を批判的に検討しながら読み進めることができる読者に対して、本書はその労力に十分以上に報いてくれる。そのような読者は、本書を注意深く読むことで、これからの理論研究が取り組むべき重要な課題に対する数多くの重要な示唆を得ることができるだろう。

(くぼた ゆうすけ・国立国語研究所准教授)